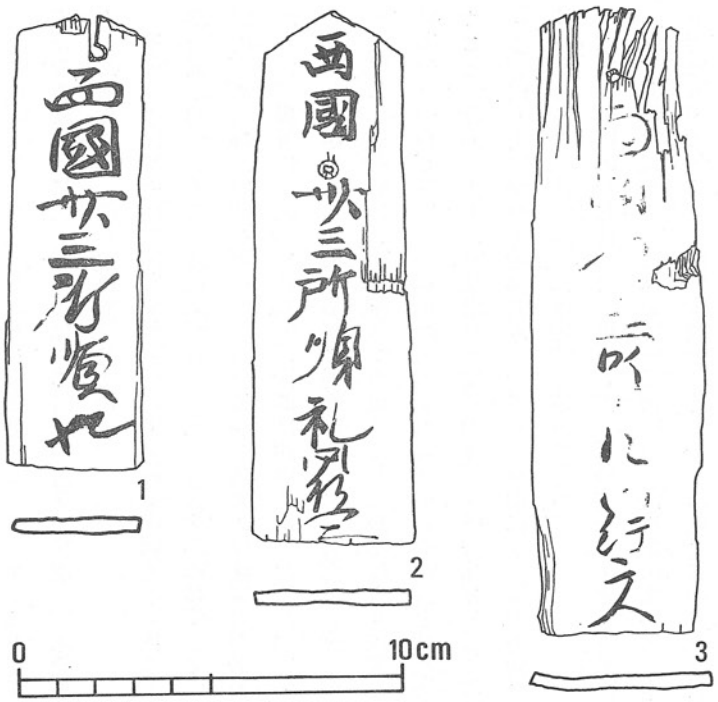

定森秀夫「図版解説・三条西殿跡出土の巡礼札」（『古代文化』33―12）　一九八一年

（定森秀夫）

京都・鳥羽離宮跡

1　所在地　京都市伏見区竹田田中殿町
2　調査期間　一九八一年（昭56）一〇月～一二月
3　発掘機関　㈶京都市埋蔵文化財研究所
4　調査担当者　上村和直
5　遺跡の種類　離宮跡
6　遺跡の年代　平安時代後期
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九八一年度に実施した鳥羽離宮跡の発掘調査は五個所あり、木簡の出土した調査は第七二次調査である。

（京都西南部・京都東南部）

第七二次調査地は鳥羽離宮内の田中殿地区に推定されている。以前に行なわれた周辺の調査では、本調査地の北東約一〇〇mの地点で推定田中殿建物群を、南西約二〇〇mの地点では推定金剛心院九躰阿弥陀堂を検出している。

第七二次調査では四面の遺構面を検出した。第一面では平安時代後期の道路跡、第二～四面では古墳時代の遺構を検出し、木簡の出土した遺構は第一面の道路側溝跡である。

第一面では調査区全面に東西方向の道路跡と両側溝を検出した。路面幅は約一〇mで路面は東から西へ向って緩やかに傾斜している。路面上には細かな礫を敷いている。道路の南北には素掘の側溝を検出した。側溝幅は北側が約六m、南側は四m検出した。深さはいずれも一・二mである。溝の形状は逆台形を呈し、底部は平坦である。

検出した道路跡は水田地割等から復原された鳥羽離宮域地割りの路面敷と一致している。鳥羽離宮関係の文献史料の検討を行なったところ、今回検出した道路跡は平安京の朱雀大路の南延長である「鳥羽作り道」から鳥羽離宮北殿を通り、東殿に至る東西方向の幹線道路である「北大路」に推定する事ができる。

木簡は道路跡の北側溝より出土した。溝の埋土は大きく三層に分かれ、上層は泥土で一二世紀～一三世紀の土器を含んでいる。中・下層は砂泥で特に下層には木質を多く含む。木簡はこのうち下層から出土し、伴出した遺物には土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器などの土器類の他、人形・扇・櫛・漆器椀・玉・下駄・陽物形などの木製品がある。中・下層より出土した土器類は器種構成や、土師器の形態・調整手法等から考え、一一世紀末～一二世紀後半に推定することができ、木簡の破棄されたのもその時期と考えられる。

8　木簡の釈文・内容

「〈百済寺　別當御房御所　権寺主廣厳上〉」　336×19×7　031

木簡は一点のみの出土で、上・下端の側面に切り込みを入れた付札状のものである。内容は権寺主廣厳より、百済寺の別當宛に出されたものの荷札と考えられる。

なお木簡解読には奈良国立文化財研究所鬼頭清明・加藤優氏に御指導いただいた。記して謝意を表したい。

9　関係文献

京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所
『鳥羽離宮跡調査概要』　一九八二年
森　蘊　「鳥羽殿遺跡の調査概報」（京都府教育委員会『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』）　一九五九年

（上村和直）